

ウジミナス建設・操業開始期における日系社員の採用

——日本鉄鋼業による対ブラジル技術移転(3)——

長谷川 伸

I はじめに

ブラジルの鉄鋼企業ウジミナス (Usiminas) は、1958年に前身の設立準備会社を再編成して日本とブラジルの合弁企業として発足し、翌年からミナスジェライス州イパチंगा (Ipatinga, Minas Gerais) において製鉄所建設を開始し、1965年に粗鋼生産50万トン規模の鋼板専門の銑鋼一貫製鉄所として完成をみた¹⁾。ブラジルへの日本鉄鋼業による技術移転は、ブラジルにおいて成功例として高く評価されているが、ウジミナスはその嚆矢かつ象徴である。一方で、ウジミナスは日本鉄鋼業にとって大規模銑鋼一貫製鉄所の建設・操業に対する海外技術協力の原点となり、その後の技術協力のモデルとなった。

これまでに我々は、1950年代末から60年代前半にかけてウジミナスの建設・操業開始にともなって実施された「人を通した技術移転」—操業指導・技術研修(教育訓練)の条件と方法を、日本において技術研修を行った幹部要員(エンジニア=技師)の動向に着目して検討してきた。その結果、以下のことが明らかとなった。

現地での操業指導・教育訓練においては、日本人派遣者がライン部門の責任者や実際の作業・操作担当者として配置されたことに象徴されるように、当初から「やって見せる」「率先垂範」が操業指導の基本姿勢であった。日本研修組は課長・係長(日本人派遣者)の補佐として配置されたので、その立場は実践的観察者(やって見せてもらいながらやってみる)へ、日本側の立場は観察的実践者(やって見せながらやらせてみる)へ転換した。「やって見せる」「率先垂範」の一環として日本人派遣者がライン部門の責任者や実際の作業・操作担当者として配置されたことにより、業務移管という課題が生じることになった。実際の業務移管は技術レベルを慎重に見極めた結果というより「思い切り」が必要なものであり、半ば自動的に行わざるを得なかったが、派遣者の心配をよそにほぼ成功した²⁾。

この結論だけ取り出してみると、言葉と文化の壁はそれほど大きな問題にはならず済んだ

1) 日本ウジミナス(1969)、第1部58-65頁。

2) 長谷川(2002a)、(2002b)。

ように見える。しかしそう見えるのは、現地で採用された日本人移民あるいはその子孫である社員（以下単に「日系社員」とする）の存在があったからではないか。逆に言えば日系社員があったからこそ、大きく異なる両国の言葉と文化を乗り越えることができたのではないか。「建設期に日本からの派遣員400人に対して現地日系社員が300人規模で採用され、日系社員の大量採用と日本人派遣者と非日系ブラジル人社員を繋ぐ役割を果たしたことは『人を通じた技術移転』を容易ならしめ、これをより強化したと考えられる」³⁾。この日本側からブラジル側への「人を通じた技術移転」の現場には現地採用の日系社員がいたのである。

では、日系社員たちは日本側とブラジル側の間で、どのような役割を担ったのか。日系社員のどのような働きが大きく異なる両国の言葉と文化を乗り越えることにつながったのか。そもそも日系社員がなぜ・どのように募集され、それに日系人がどのように応募し、ウジミナスに入社したのか。こうしたことを知りうる当時のウジミナスの日系社員に関する資料は非常に限られている。というのも、彼らの手によって書かれ広く公表されたものは見当たらず、日本ウジミナスの社史⁴⁾や日本からの派遣者による手記⁵⁾に現れる記述か、当時の関係者へのインタビュー取材に頼る他はないからである。そこで本稿では、ウジミナス建設・操業開始期に大量に採用された日系社員に焦点をあて、彼らが「人から人への技術移転」において果たした役割を明らかにするための準備作業を行う。具体的には、ウジミナスが日系人に求めていた人材像と、その要求に叶う日系社員の大量採用を可能にした背景を明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。まず、Ⅱにおいてウジミナスにおける日系社員数の推定を行った上で、Ⅲにおいてウジミナスがどのような日系社員を求めていたのか、なぜ日系社員を大量に採用したのかを明らかにする。Ⅳにおいて、そうしたウジミナスの要求に応えられるだけの優れた人材がどれほどいたのかを推定する。Ⅴは結論である。

Ⅱ ウジミナスにおける日系社員数

ウジミナス建設・操業開始期において日系社員はどのように増えていったのだろうか。ウジミナスの製鉄所建設地がイパチंगा地区と決定されたのは1958年5月であるので⁶⁾、ウジミナスの実質的なスタートは1958年であり、この年に建設フェーズと操業準備フェーズが始まった

3) 長谷川 (2002b), 89-90頁。

4) 日本ウジミナス『十年史』1969年。日本ウジミナス五十年のあゆみ編集委員会(編)『日本ウジミナス五十年のあゆみ：鉄は日伯を結ぶ』日本ウジミナス, 2008年。

5) 例えば、ウジミナス回想録編集グループ(編)『ウジミナス回想録』1997年, 中村直人『高炉物語』アグネ技術センター, 1999年。

6) 白石芳雄(八幡製鉄)を団長とする、将来現地において建設・操業に従事する責任者を持って組織された建設準備団12名がブラジルに滞在したのは1958年4月から約1ヶ月であった。この時に製鉄所建設地がイパチंगा地区と決定された(日本ウジミナス(1969), 第1部54頁)。

と見なされる⁷⁾。したがって以下、1958年以降の日系社員数の変化を推定していく。

1 建設協力団による日本語の社内報『時報いばちんが』

当時の日系社員数の推定作業を、現在入手しうる資料の中で日系社員の動向をもっともよく伝えていると考えられる社内報『時報いばちんが』の記事を分析することから始めよう。

『時報いばちんが』は、1960年6月から1966年11月までの6年5ヶ月にわたって計52回、製鉄所があるイパチンガにおいて日本語で発行された新聞である。建設工事の進捗状況や操業状況、人事往来についての記事、随筆などが掲載されている。第1号（1960年6月15日）は9頁、第2号（1960年7月15日）は14頁のタイプ打ちのガリ版印刷で、第3号（1960年8月10日）からは6頁を基本とする活版印刷となった。第1号によると発行責任者は伊丹英雄、編集担当者は近藤、発行所は「ウジミナス、イパチンガ建設局」となっているが、第3号では、発行所の表記が異なり「ミナス製鉄所建設協力団」となっている。発行責任者となっている伊丹英雄は、日本からの派遣者であり建設協力団のメンバーである。編集担当者の近藤は、第13号（1961年6月10日）の「編集後記」にあるように日系社員の近藤準市郎である。第1号の「編集後記」には、「この企画は丁度一年前福山局長の着任と同時になされたものであるが、ガリ版刷りが手に入らず今日に至った。内容、体裁ともに未だに貧弱なものであるが、福山団長の巻頭言の通り、この不自由な現場における懇親の広場として陰涼樹として大事に育てていきたいものである」とあるから、この『時報いばちんが』は建設協力団で企画構想され発行されたものと考えられる。以下、必要に応じて他にみられる断片的な情報や聞き取り記録で補強しながら、『時報いばちんが』の記事を使って日系社員数の推定作業を進めることとする。

2 『時報いばちんが』における日系社員に関する記事

(1) 記事「建設協力団の紹介」（1960年6月）⁸⁾

この記事は、1960年5月1日付で建設局の職制が変更され建設本部長（社長）直属の建設協力団が新設されたことを報じている。この記事によれば、1960年5月1日現在日系社員は建設協力団に15名、建設局に2名、その他3名の計20名となっている。日本からの派遣者16名は全員この建設協力団に配属となった。この時点では、建設協力団だけをとってみても日系社員は日本からの派遣者数を上回っている。なお、日本側が採用した日系技師3名は建設協力団に配属されており、ブラジル側が採用した日系技師2名は建設局に配属されている。

(2) 記事「ウジミナス採用日系職員紹介」（1961年9-10月）⁹⁾

7) 長谷川（2002a），116頁。

8) 伊丹（1960），2-3頁。

9) 「ウジミナス採用日系職員紹介（1）」『時報いばちんが』1961年9月10日，4頁。「ウジミナス採用日系職員紹介（2）」『時報いばちんが』1961年10月10日，6頁。「ウジミナス採用日系職員紹介（3）」『時報いばちんが』1961年11月10日，6頁。

1961年9-11月に『時報いばちんが』に3回に分けて掲載された記事「ウジミナス採用日系職員紹介」によれば、1961年後半にウジミナスに在籍していた日系社員は64名であり、このうち1958年入社7名、1959年入社8名、1960年入社3名、1961年7名である。他の39名については入社年が明記されていないが、記事の性格からしてそのほとんどは1960-61年入社と考えられる。このことから、1959年には少なくとも15名、1960年には少なくとも18名の日系社員が在籍していたことがわかる。日系社員64名のうち職種が示されているのは技師のみであるが、技師として採用されたのは、1958年入社7名のうちの5名（3名は日本側、2名はブラジル側が採用）と入社年が示されていない1名の計6名と考えられる。

1961-63年の日系社員の人数に関しては、『ウジミナス物語』には1961年4月時点の話として「現地採用の日系職員も100名を越し」との記述が見られる¹⁰⁾。1962年8月時点で現地採用の日系人は全社で約380名であるとの当時の日系社員による証言がある¹¹⁾。一方で、ウジミナスの日系社員募集広告では、1963年3月時点では約200名とされている¹²⁾。

(3) 記事「ウジミナス建設に日本の人的協力」(1966年11月)¹³⁾

この記事では、日本からの派遣者244名、日本から派遣されたメーカー指導員85名、現地採用日系社員約400名となっている。これがいつの時点の数値であるのか明記されていないが、1966年であることは間違いなさだろう。この時点では、日系社員数が日本からの派遣者数を上回っていることが注目される。

3 小括

本章で言うことは以下の通りである。第1に、記事(1)の1960年5月に20名の日系社員が在籍していたとする情報は、記事(2)が示すこと、すなわち1960年には少なくとも18名の日系社員が在籍していたことと符号する。第2に記事(1)と記事(2)から、1958年という比較的早い時期に日系の技師が採用されていたこと、しかも入社7名のうち5名が技師であったことは注目されてよい。第3に記事(1)と記事(2)、記事(3)から、1960年5月時点で20名であった日系社員は、1年半後の1961年11月にはその3倍以上の64名まで、1966年には400名まで増加している。

日本からの派遣者数との関係で言えば、1960年5月時点では日系社員の方が多く、1962-66年の期間においても1962年9月に日本からの派遣者は244名でピークとなるので、日系社員の方が多(大幅に上回る)ということになる。

では、ウジミナスはその建設・操業開始期においてどのような日系社員を求めていたのか。なぜ400名にも及ぶ日系社員を採用したのか。この2つの問いに答えるために以下、章を変え

10) 中川 (1974), 75頁。

11) 奥原譲二氏からの聞き取り、ベロオリゾンテ市、2008年8月7日。

12) 「ウジミナス日系社員募集」『パウリスタ新聞』1963年3月9日、7頁。

13) 「ウジミナス建設に日本の人的協力」『時報いばちんが』1966年11月30日、2頁。

て当時のウジミナスによる日系社員の採用活動を検討する。

Ⅲ ウジミナスによる日系社員の採用活動

ウジミナス建設・操業開始期における日系社員の採用活動については、まとまった資料がないためにその全貌は明らかではない。しかし、当時ブラジルで発行されていた邦字新聞に掲載された募集広告、関係者による手記、関係者からのインタビューなどからウジミナスがどのような日系社員を求めているのかを窺い知ることは可能である。本章では、まず邦字新聞に掲載された募集広告を検討した後、1961年11月と1962年3-4月に行われた採用活動を取り上げ、ウジミナスがその建設・操業開始期においてどのような日系社員を求めているのか、なぜ日系社員を大量に採用したのかを検討したい。なお、この2つの採用活動を取り上げるのは、最も多くの採用者があったと見られること、後述するようにこのための募集広告の出稿回数が最も多いと思われること、および当該の採用活動の担当者から取材できたことがあるからである。

1 ウジミナスによる日系社員募集広告

では、まずウジミナスの日系社員募集広告を検討しよう。表1は、ウジミナスの日系社員の採用活動が本格化した1960-63年の3年間に『サンパウロ新聞』に現れたウジミナス社員募集広告の一覧である。1946年10月に創刊された『サンパウロ新聞』はブラジルで当時発行されていた邦字新聞では最も多い発行部数を誇り、1960年頃の発行部数は約6万部と関係者によって推定されている¹⁴⁾。なおこの表は、国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムから筆者が作成したものであるが、欠号が多いため収録されなかった募集広告がある可能性がある。ただし、このことはウジミナスがどのような人材を日系人に求めているのかを知るためにはさしたる障害にはならないだろう。

この表を一瞥してただちにわかることは、試験地のほとんどがサンパウロ州、さらに言えばサンパウロ市であることである。サンパウロ市以外ではサンパウロ州のリンズ市、マリリア市、プレジデnte・ブルデnte市、パナラ州ロンドリーナ市・クリチバ市が見られるが、リンズ市の2回以外はいずれも1回となっている。本社がサンパウロ市から約590km離れたミナスジェライス州の州都ベロオリゾンテに、製鉄所がベロオリゾンテからさらに約220km離れたイパチンガにあったウジミナスがサンパウロ州やさらに遠方のパラナ州で採用活動を行うことは、社員に採用された者がこれまで暮らしてきた土地から遠く離れ、日系社会の存在しない地で暮らすことを意味していたのである。

次に募集職種を見ると、技師の募集広告は1961年5月まで、通訳のそれは1962年前半まで3-

14) ブラジル日本移民70年史編集委員会（1980）、287頁。『サンパウロ新聞』編集長の鈴木雅夫氏からの私信、2008年4月19日。

表1 『サンパウロ新聞』におけるウジミナス社員募集広告 (1960-63年)*1

No.	表題	出稿回数	初出稿日	試験・申込日時 (開始日-終了日)		試験地*2	募集職種・応募資格*3					
				技師	通訳		事務員	技術員	作業員	その他		
1	急募	1	1960/08/06	1960/08/09	-	SP サンパウロ市						●*4
2	USIMINAS	1	1960/08/13	1960/08/16	-	SP サンパウロ市	●	●				
3	募集	1	1960/12/15	1960/12/17	-	SP サンパウロ市			●P	●P		
4	社員募集	1	1961/01/13	1961/01/14	-	SP サンパウロ市	●JP大		●JP高	●JP高		●*5
5	募集	1	1961/02/08	1961/02/10	-	SP サンパウロ市			●P	●P		●*4
6	急募	1	1961/03/16	1961/03/21	-	SP サンパウロ市			●P	●P	●P	
7	急募	1	1961/05/12	1961/05/19	-	SP サンパウロ市			●P	●P		
8	募集	2	1961/05/20	1961/05/26	-	SP サンパウロ市	●P高		●P高			
9	急募	1	1961/07/13	1961/07/18	1961/07/19	SP サンパウロ市		●JP	●J			
10	急募	1	1961/07/25	記載なし	-	SP サンパウロ市			●			
11	急募	1	1961/08/03	1961/08/09	-	SP サンパウロ市			●P	●		
12	急募	1	1961/09/09	1961/09/19	1961/09/21	SP サンパウロ市			●JP	●JP		
13	ウジミナス操業近し	4	1961/10/27	1961/11/13	1961/11/14	SP サンパウロ市		●JP高	●JP高	●JP高		
				1961/11/15	1961/11/16	SP リンス市		●JP高	●JP高	●JP高		
				1961/11/18	1961/11/19	SP サンパウロ市		●JP高	●JP高	●JP高		
14	急募	1	1962/01/23	1962/02/02	1962/02/03	SP サンパウロ市			●JP高	●高		
15	ウジミナス製鉄所 作業員募集	3	1962/03/20	1962/03/25	1962/03/31	SP リンス市 マリリア市						●J
16	ウジミナス 日系操業職員募集	2	1962/03/21	1962/04/01	-	SP サンパウロ市		●I高	●I高	●I高		
17	ウジミナス化成 鑄造工場作業員募集	2	1962/05/16	1962/05/20	-	SP サンパウロ市					●	
18	ウジミナス 日系職員募集	2	1962/05/16	1962/05/20	-	SP サンパウロ市				●JP高		
19	急募	1	1962/06/16	1962/06/27	1962/06/28	SP サンパウロ市			●JP			
20	ウジミナス 日系社員募集	1	1962/07/31	1962/08/04	1962/08/06	SP プレジデンテ・ ブルデンテ市			●JP高	●JP高	●JP中	
				1962/08/10	1962/08/13	PR ロンドリーナ市			●JP高	●JP高	●JP中	
				1962/08/14	1962/08/15	PR クリチーバ市			●JP高	●JP高		
21	ウジミナス 日系社員募集	1	1962/10/18	1962/10/20	1962/10/21	SP サンパウロ市			●JP	●JP		
22	ウジミナス製鉄所 社員募集	2	1963/01/18	1963/01/20	-	SP サンパウロ市			●JP	●JP	●	
23	募集	1	1963/06/11	1963/06/15	-	SP サンパウロ市			●JP	●JP		

(註) *1 この表は、国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムから筆者が作成したものである。このマイクロフィルムに納められている『サンパウロ新聞』は欠号が多いため、記載漏れの可能性がある。*2 SP：サンパウロ州、PR：パラナ州。*3 I：「日本移民の場合渡伯後二年以上経過の者」が条件となっているもの、J：日常会話レベルの日本語を理解することが条件となっているもの、JP：日常会話レベルの日本語とポルトガル語を理解することが条件となっているもの、P：日常会話レベルのポルトガル語を理解することが条件となっているもの、大：応募資格が大卒となっているもの、高：応募資格が日本で言う新制高校卒となっているもの、中：応募資格が日本で言う中卒となっているもの。*4 調理師。*5 看護婦、栄養士。

4回現れる程度である。最も頻繁に募集広告が出された職種は、事務員と技術員(テクニコ¹⁵⁾)であり、23の募集広告のうち事務員は19回、技術員は16回募集がなされている。一方で、現場作業に従事する作業員(オペラドール)は、1961年3月から1963年1月まで計4回募集が行われている。もちろん、頻繁に募集があるからといって直ちにその職種がより数多くの人員を必要としたとは必ずしも言えないし、募集したにもかかわらず思うような人材を採用することができないために募集を繰り返した可能性もある。ほとんどの採用試験において採用目標と採用実績のデータが入手不能である以上、ここで言えることは限られている。しかし、技師を含むすべての職種について日系社員をウジミナスは必要としたことは言えよう。なお、求められる学歴に注目すると、表記がないものもあるが、おおむね技師は大卒あるいは高卒、事務員・技

15) テクニコ (tecnico) とは工業高校を卒業した者で、業務日誌をつけたり、メンテナンス計画を立てたりするのが仕事である。管理面から見ればラインであったが、技術面から見ればスタッフ的な位置にあった(岡正敏氏からの聞き取り、サンパウロ市、2006年6月27日)。

術員は高卒，作業員は中卒（いずれも日本の学制改革後の教育制度ベース，以下同じ）となっている。

さらに，どの程度の日本語・ポルトガル語の運用能力を応募条件としたのか募集広告上の表記を見てみると，当初は日常会話レベルのポルトガル語運用能力，1961年9月以降はほとんどの場合，ポルトガル語と日本語の両方の日常会話レベルの運用能力を求める表記となっている。このことからすれば，ウジミナスとしては当初からポルトガル語と日本語の両方の日常会話レベルの運用能力が必要と考えていたものの「日系人が日本語ができるのは当然であり，応募条件として明示する必要はない」と考えていた可能性が高い。逆に言えば，当時すでに日常会話レベルの日本語ができない日系人がいたということである。

なお，1962年3-4月の採用活動（No.16）の募集広告において「日本移民の場合渡伯後二年以上経過の者」が条件となっていることは興味深い。これは1952年に再開された戦後移民が応募してくることを想定したものであり，2年間のブラジル滞在で得られるポルトガル語の運用能力とブラジル社会への適応能力を求めたものと考えられる。いずれにせよ日系社員募集広告において，技師を含めてほとんどすべての職種にわたって，日本語・ポルトガル語両方の日常会話レベルの運用能力を応募条件としたと言ってよいのではないか。

以下では，表1にあるように最も出稿回数の多かったと考えられる2件，1961年11月と1962年3-4月にサンパウロ州内で行われた採用活動について見ていく。

2 1961年11月のサンパウロ州サンパウロ市・リンス市での採用活動

ウジミナスは『サンパウロ新聞』に「ウジミナス操業近し」と題した募集広告を1961年10月末から11月上旬にかけて，少なくとも4回（1961年10月27日，11月2日，11月4日，11月7日）出稿した（資料1）。この広告によると，募集対象は事務員，技術員，通訳となっており，このうち通訳はポルトガル語・日本語に通じる者とされ，事務員・技術員はポルトガル語と日本語の日常会話ができる者が条件とされている。学歴は新制高校卒業（日本で就学の場合）・中卒（ブラジルで就学の場合）とされ，年齢は18歳から45歳までとなっている。この広告では，大学卒の技師は募集対象ではなかった。選考日と場所は，サンパウロ市内（ウジミナス・サンパウロ事務所）で2回（11月13-14日，18-19日），サンパウロ市から約430km離れたサンパウロ州リンス市（リンス青年会館）で1回（11月15-16日）となっている。

この採用活動に，假屋隆二氏（1961年5月に日本から派遣された製鉄所調整部派遣人事掛長¹⁶⁾）とともに参加した三浦治二氏（1960年入社，現地採用，製鉄所調整部庶務掛長¹⁷⁾）によれば，筆記試験では，当時の社会や商工業についての記述を問題文としてポルトガル語から日本語へ，日本語からポルトガル語へ翻訳できるかをテストしたという。計算問題は，日系人は計算能力

16) 假屋（1997），129頁。

17) 「ウジミナス採用日系職員紹介（3）」『時報いばちんが』1961年11月10日，6頁。

資料1 「ウジミナス操業近し」『サンパウロ新聞』1961年11月4日、1頁。

ウジミナス 操業近し

溶鑪の火入れを來春に控えるウジミナス、インテン
デント・カマラ製鉄所ではその組織体制も整い目下操
業の準備に日夜余念のない現状であります。日伯合併
事業を円滑にする意味からも日系人の有能なる人
材を求めており、次の要領で募集を行います。

一、募集對稱

- 1、事務員(葡語及び日語の日常會話を解する程度以上)
- 2、技術員(同上、電氣、機械、冶金、電氣通信 應用化學關係)に通ずるもの)
- 3、通譯(日葡兩語に通ずるもの)

二、應募資格

- 1、學歷 日本新制高校(舊中) 伯國中學卒以上
- 2、年齢 滿十八才以上四十五才迄

三、給與條件

- 1、時間給 事務員(十八コント||四十コント) 技術員(二十コント||四十コント) 専門學校卒業以上にして月給社員に適するものは別途處遇する。
- 2、月給

四、選考月日及び場所

十一月十三日||十四日ウジミナスサンパウロ事務所
(Rua Xavier de Toledo, 105, No. 111, Vila
Cristina, São Paulo, Brasil)
十一月十五日||十六日 リンス青年會館(リンス市)
十一月十八日||十九日ウジミナスサンパウロ事務所
毎日九時||十二時 十四時||十七時
十一月十八日迄 サンパウロ事務所 須貝 幸雄宛

五、書類提出先及び締切日

志願書一通(葡語) 履歴書一通(日語)
志願書は前記試験場にて記入提出する可。

六、提出書類

ウジミナス・ジエライス
製鐵株式会社

が高いから必要ないとしてあまり出題しなかったという。面接試験は、ポルトガル語と日本語で計2回行った。邦字新聞を読んでいるか、社会に関心を持っているかを試したという¹⁸⁾。

この会場へはアラサツバ、バウルー、マリリア、平野植民地からも参加があったという¹⁹⁾。応募者は農民や商人の子弟が多かったとしている。「行ってみなければわからない」状況だったので採用目標はなかったが、リンス市では120人以上を採用したという。この時に採用した者のほとんどが立派な通訳になったとしている²⁰⁾。

3 1962年3-4月のサンパウロ州リンス市・マリリア市での採用活動

ウジミナスは1962年3月下旬、『サンパウロ新聞』に「ウジミナス製鉄所作業員募集」と題した募集広告を少なくとも3回(1962年3月20日、23日、24日)出稿した(資料2)。この広告では「ウジミナス製鉄所は操業を間近に控えて大量の作業員を募集します」とあるように作業員のみが募集対象となっている。その応募資格として、16歳から35歳までの身体強健な者かつ日本語の日常会話を解する程度とし、学歴については示されていない。ただし、他の作業員の募集広告においては中学卒以上との記述が見られるので同様の採用基準であったと推測される(表1)²¹⁾。選考日と会場は、サンパウロ州リンス市のフェルナンド・コスタ工業学校とマリリア市の職業訓練学校(SENAI)でいずれも3月25-31日までとなっている。

この採用活動に参加した阿南惟正氏(1961年10月に日本から派遣された製鉄所調整部調整掛

18) 三浦治二氏からの聞き取り、ペロオリゾンテ市、2008年8月22日。

19) 三浦治二氏からの聞き取り、ペロオリゾンテ市、2006年8月30日。

20) 三浦治二氏からの聞き取り、ペロオリゾンテ市、2008年8月22日。

21) 「ウジミナス日系社員募集」『サンパウロ新聞』1962年7月31日、1頁、「ウジミナス日系社員募集」『パウリスタ新聞』1963年3月9日、7頁など。

資料2 「ウジミナス製鉄所作業員募集」『サンパウロ新聞』1962年3月20日，6頁。

ウジミナス製鉄所

作業員募集

。。。リンス地区マリリア地区。。。

ウジミナス製鉄所は操業を間近に控えて大量の作業員を募集します。

資 格

一、年齢十六才から三十五才まで

一、身体強健な者

一、日本語の日常會話を解する程度

受 付

一、期日 三月二十五日から三月三十一日まで

毎日 八時から十一時まで
十三時から十六時まで

一、場所 下記の二ヶ所で同時に行う

リンス市
Escola Industrial "Fernando Costa"

マリリア市 Escola do Senai

志願者は高紙3×4一枚持参のこと。

長²²⁾によれば、この時は「読み書きそろばん」ができるか、マナーは身に付いているか、健康であるかを判断基準として、筆記試験（分数の足し算などの算数）と面接を行ったという。面接は日本語とポルトガル語の2回行われた。面接では、入社動機や結婚しているか否か、親兄弟はいるかなどを尋ねたとしている²³⁾。

さらに阿南氏はこの時の応募者について以下のように述べている。「応募者は、ほとんどが日系だったと記憶している。リンスやマリリアに住んでいてイパチンガまで行くブラジル人はいないだろう。日系二世を対象に（目当てに）採用活動を行ったが、応募者の中には昭和28年に始まった『新移民』もいた。彼らのなかには、高卒者や大卒者、ポルトガル語が良くできる者がいた。作業員を募集したが、一部は事務員として採用した。同行した中川秀幸氏が報告書で『汗牛充棟』という言葉を使っていたことにも見られるように、日本で暮らす者よりも日本語が堪能な現地の日本人もいた²⁴⁾。募集にあたって採用担当者は日系二世を目当てにしていたこと、応募者に優秀な「新移民」がいたこと、作業員を募集したが一部は事務員として採用したとの証言は注目される。

この時の採用活動の成果については阿南氏は以下のように述べている。「現地の情報が限られていたので予定採用数などは決めていなかったが、160名を採用できたことは大成功であった²⁵⁾。「この時、私達が実施した採用試験は、460人の応募者の中から160人を採用するという実績を上げた。採用された人で、特にその中で日系社員は操業開始にあたって通訳業務のみな

22) 阿南（1997）、147頁。

23) 阿南惟正氏からの聞き取り、北九州市、2008年7月17日。

24) 同上。

25) 同上。

らず、実務においても大きな戦力として効果を発揮することとなった」²⁶⁾。

4 小括

本章で言うことは以下の通りである。第1にウジミナスは、募集広告において、技師を含めてほとんどすべての職種にわたって募集を行い、日本語・ポルトガル語両方の日常会話レベルの運用能力を応募条件とした。学歴については、おおむね技師は大卒あるいは高卒、事務員・技術員は高卒、作業員は中卒（いずれも日本の教育制度ベース）であることが求められた。そうした日系社員を採用するためにウジミナスは、その本社・製鉄所から遠く離れたサンパウロ州・パラナ州で採用活動を行った。

第2に1961年11月の採用活動では、事務員・技術員・通訳が必要とされた。通訳として採用される者以外の事務員・技術員にも日本語とポルトガル語の読み書きができ、一般常識に明るく、日本で言う新制高校卒業以上の学歴を有する日系社員が求められた。そうした人材を求めた採用活動は、リンス市で120名以上を採用することに成功した。

第3に1962年3月の採用活動は、日系二世を目当てに健康でしつけがされた現場で働く作業員を大量に採用することを目的としていた。募集広告にはポルトガル語の運用能力についての言及はないものの、面接が日本語とポルトガル語の2回行われた点からすれば、作業員であっても日本語とともにポルトガル語の運用能力がある程度求められたと言っているだろう。そうした人材を求めた採用活動は、日本語が堪能な日系人や優秀な「新移民」の応募に恵まれて成功し、リンス市・マリリア市で160名を作業員・事務員として採用することができた。

以上より、ウジミナスがその建設・操業開始期においてどのような日系社員を求めているのか、なぜ日系社員を大量に採用したのかという2つの問いに答えることができる。すなわちウジミナスは、技師を含めてほとんどすべての職種にわたって、一般常識に明るく、日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる日系社員を求めている。学歴については、おおむね技師は大卒あるいは高卒、事務員・技術員は高卒、作業員は中卒をその応募資格とした。そうした日系社員を従業員構成上多数を占める事務員や作業員としても採用・配置することをウジミナスは必要とし、しかもその要求に応えられるだけの優れた人材が供給可能であったために、結果として日系社員を大量に採用したと考えられる。

では、そうしたウジミナスの要求に応えられるだけの優れた人材がどれほどいたのか。この問いに答えることが、次章の課題である。

IV 1950-60年代のブラジルにおける日系人

本章では、1950-60年代のブラジルにおける日系人の状況を検討することを通じて、前章に

26) 阿南 (2007), 87頁。

みた当時のウジミナスの要求に応えられるだけの優れた人材がどれほどいたのかを推定する。

1 「ブラジル日系人実態調査委員会」による調査

ウジミナスが日系社員を大量に採用した1960年代初頭において、ブラジルの日系人はどのような状況にあったのだろうか。とくに採用活動を規定する人口とその地域的・年齢的分布、教育水準はどうであったか。このことを1958年に行われた「ブラジル日系人実態調査委員会」による調査結果（以下単に「統計資料」とする）によって確かめることにする²⁷⁾。なお、必要に応じて他の文献でデータを補うこととする。

この調査が行われるに至った経緯は以下の通りである。ブラジルに初めて日本移民が渡航して50年目にあたる1958年に、日系人（日本生まれとその子孫たちの総称）によって構成された「祭典委員会」は、日本移民史の編纂を恒久的な記念事業の一つとして企画した。しかし、移民史を編纂するに必要な包括的な資料がなかったために、1958年1月の「祭典委員会」の承認のもとに「ブラジル日系人実態調査委員会」が組織され、実態調査を行うことになった²⁸⁾。

この調査では、ブラジルにおける日系人の全員が対象とされ、その現状と歴史的背景を調査目的とし、日系人の配偶者である非日系人およびその子孫計8,584人を含む計66,637家族、438,719人が調査された²⁹⁾。

2 ブラジルの日系人口：二世と戦後移民

1908年に始まった日本からブラジルへの移住は1941年に第2次大戦が勃発するまでに、総計18万6,272人を数えるに至っている。移民は約10年間の戦争による空白を経て1952年に再開されたが、戦前に比べると低調で1962年6月現在、42,631人を数えるに過ぎない。1962年6月までに日本からブラジルに移住した人々の総計は、228,903人である。

1958年6月時点でのブラジルにおける日系人口（日本移民とその子孫を含み、日系人と結婚した非日系人およびその子孫である混血児は含まない）は43万135人であり、ブラジル総人口の0.65%である。この日系人口のうち、ブラジル生まれは67.7%を占め、なかでもブラジル生まれの第1世代である二世は日系人口の過半数52.1%を占めるに至っている³⁰⁾。以下、ウジミナスによる採用活動で注目された世代、日系二世と戦後移民について述べよう。

第1に、ブラジル生まれの第1世代である日系二世は、日本人の子どもである一方でブラジルの社会に生まれ育つブラジル人である。そのため「日本人の子としては、親から日本的なしつけ、価値観を教えられ、ブラジル人としては、学校や社会から、この国の慣習、道徳、価値

27) この調査結果は、ブラジル日系人実態調査委員会（編）『ブラジルの日本移民』東京大学出版会、1964年にまとめられている。

28) ブラジル日系人実態調査委員会（1964a）、1頁。

29) 同上書、1-3頁。

30) 同上書、25頁、29頁、223頁。

観を植えつけられていく—この二世にみられる二つの価値観は、矛盾として、かれらのなかで、深刻な相克、葛藤を呼びおこさずにはおかない³¹⁾。鈴木正威は「移民というものは、いずれは同化する運命にあるものだろうが、二代目の二世は、親を日本人とすることから生じるさまざまな制約から、現在、同化のプロセスにある」として、そうした矛盾を抱える二世を「同化過程にある世代」と規定している³²⁾。

そうした日本とブラジルの2つの価値観の間を揺れ動き葛藤しなければならない同化過程にある二世のうちに、日系社会にとって大きな役割を果たす者が現れるとアンドウ・ゼンパチは次のように述べている。

一世でもある日本移民は、南欧移民、すなわちイタリア、スペイン、ポルトガル人のように、その言葉や生活様式のあまり相違しないブラジルで生活するのに、それほど苦労しないのにくらべると、異質文化の中でうける精神的緊張と言葉が充分に通じないために起きる劣等感意識のために、日系社会形成の初期における困難は甚だしかった。それにもかかわらず、これらの悪条件と苦闘して日系社会の開拓時代に、彼等一世移民は経済的な基礎を築いたのであるが、その後、日系社会がより以上の発展をみたのは、二世の力強い協力のおかげであった。しかも、二世のなかで最もすぐれた協力者となりえたものは、日本語もポルトガル語も自由に話し、さらに双方も読み書きできるという型のものであった。このような型の二世は、日系人社会の中でも、ブラジル社会の中でも堂々と活動ができ、一世がブラジルで生活する上での短所を補い、その長所を助長することができた³³⁾。

この「日本語もポルトガル語も自由に話し、さらに双方も読み書きできる」二世がウジミナスにおいて果たした役割について、ブラジル日本移民70年史編纂委員会はこう記している。

日本語とポルトガル語のコミュニケーションの不備は初めからつきまとった。このギャップを埋めたのは日系の二世であった。彼等は多く、サンパウロ、リオの大学を卒業した人々で、有利な機会を放棄してミナスへやって来たのである。建設段階でウジミナスで働いた二世はおよそ50名、日本側の記録では、全てが優秀なブラジル人であったと評価されている³⁴⁾。

この記述からもわかるように「日本語もポルトガル語も自由に話し、さらに双方も読み書きできる」日系二世は、まさにウジミナスが日系人に求めた人材であったといえよう。この点で、ウジミナスが日系社員を大量に必要とした時期に、日系人口の過半数を二世が占め、募集対象にした年齢層に実に二世の32.7% (20-44歳)、47.7% (15-34歳) が含まれていたことは、ウジミナスにとってタイミングが良くチャンスに恵まれていたと言えよう (図1)。

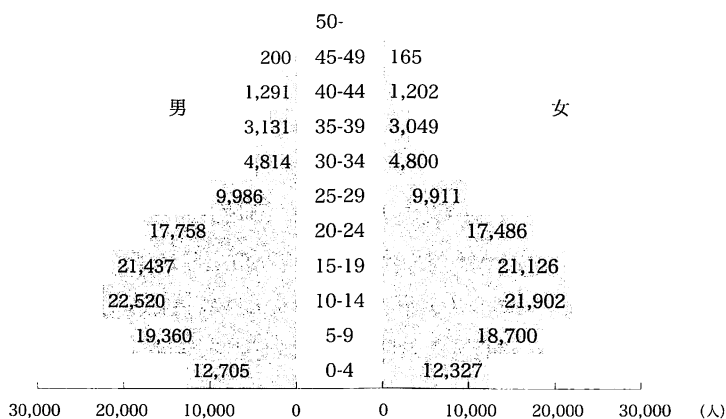
31) 鈴木 (1967), 113頁。

32) 同上書, 113-114頁。

33) アンドウ (1967), 98頁。

34) ブラジル日本移民70年史編纂委員会 (1980), 120頁。

図1 日系二世の年齢構成（1958年）



（出所）ブラジル日系人実態調査委員会（1964b），32頁より作成。

第2に、戦後移民は先に触れたように1962年6月時点で42,631人を数えるに過ぎないが、以下の記述に見るように戦前移民との差異が強調されている。「戦後移民については、…中等教育以上の学歴をもつものが60%以上を占めるようになり、またそのうち、高等教育をうけたものの比率も、約20%に上っている。とりわけ、単独移民の学歴は高く、中等以上が78.2%を占めているが、これは戦後の新しい学校制度による若い人々を多く含んでいるからであって、そのうち高等教育をうけているものは21%程度にとどまっている」³⁵⁾。

これが、前章で扱ったウジミナスの社員募集に応募してきた戦後移民（新移民）に優秀な者が多かった理由であろう。もちろん、ポルトガル語の運用能力とブラジル社会への適応能力については来伯時には不十分であったので、表1中の1962年3-4月の採用活動（No.16）の募集広告において「日本移民の場合渡伯後二年以上経過の者」を応募資格としたのであろう。

3 日系人の地域的分布

次に地域的分布を見てみよう。日本人移民は、当初ブラジルのどこに入植したか。戦前では実に93%、戦後でも67.5%までが、サンパウロ州に集中している。戦後ではパラナ州およびアマゾン地方への入植も目立つ³⁶⁾。日系人の地域的分布は1958年6月時点でもこうした事情を色濃く反映している。すなわち、サンパウロ州325,520人（75.68%）、パラナ州78,097人（18.16%）、マツグロツ州8,886人（2.06%）、リオデジャネイロ州およびグアナバラ州計5,803人（1.35%）、パラ州およびアマゾナス州その他アマゾン地方の準州計5,227人（1.21%）、ミナスジェライス州2,878人（0.67%）、などとなっている³⁷⁾。

35) ブラジル日系人実態調査委員会（1964a），236頁。

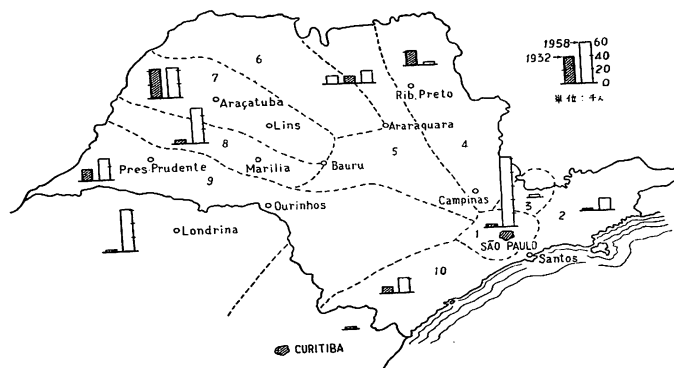
36) 同上書，247頁。

37) 同上書，25頁。

すなわち、1958年時点のブラジルにおける日系人の4分の3はサンパウロ州、2割はパラナ州に分布し、この2州合計で9割以上を占める。その一方でウジミナスが立地するミナスジェライス州はサンパウロ州に隣接しているが、その日系人口は全体の0.67%に過ぎない。ウジミナスがその本社・製鉄所から遠く離れたサンパウロ州・パラナ州で採用活動を行ったのは、そこに日系人口が集中していたからである。

さらに、1932年と1958年における日系人のより細かい地域分布を示した図2を見てみると、ウジミナスが選んだ採用試験地はパラナ州の州都クリチバ市を除けば、その周辺エリアすなわち、サンパウロ市とその近郊、ノロエステ地方、パウリスタ延長線地方、ソロカバーナ地方、ロンドリーナ地方のいずれにも比較的多くの日系人がいたことがわかる。

図2 サンパウロ州・パラナ州における日系人の地域別分布 (1932-58年)



(註) 1：サンパウロ市とその近郊、2：セントラル沿線、3：ブラガンサ地方、4：モヂアナ地方、5：パウリスタ延長線地方、6：アララクワラ地方、7：ノロエステ地方、8：パウリスタ延長線地方、9：ソロカバーナ地方、10：南サンパウロおよびサントス・ジュキアー地方。

(出所) 齊藤広志 (1960), 247頁, 表29。

4 日本語・ポルトガル語の学習機会としての学校教育

前章で明らかになったようにウジミナスは、技師を含むほとんどすべての職種にわたって、一般常識に明るく、日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる日系社員を求めている。こうした人材の育成は、日本語とポルトガル語の両方の学習機会が十分に与えられて初めて可能となる。当時の日系人にとってのポルトガル語の学習機会はブラジルの公立学校によって、日本語の学習機会は日語学校によって与えられた。日語学校とは、日本語を教え日本的な教養を身につけることを目的として、移民がその子弟向けに設けた私塾である³⁸⁾。加えて、家庭によっては日本語やポルトガル語の学習機会も与えられると考えてよいだろう。

こうした学習環境のもとで、日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きが

38) 同上書, 30頁。

できるようになるためには、ブラジルの公立学校と日語学校の両方に通学する、ブラジルの公立学校にのみ通学しつつ家庭では十分な日本語学習を行う、という組み合わせが考えられる。なおこの他に、日語学校にのみ通学しつつ家庭では十分なポルトガル語学習を行うことも考えられるが、移民を親とする家庭ではポルトガル語での十分な学習が困難であり、中等教育課程に進学できないので、この組み合わせはウジミナスが求める学歴の要件から外れてしまう。

では、ブラジルの公立学校と日語学校の両方に通学した者、ブラジルの公立学校にのみ通学しつつ家庭では十分な日本語学習を行った者は、当時どれほどいたのだろうか。これをウジミナスが募集対象とした年齢層（18歳から45歳まで、ただし作業員は16歳から35歳まで）と学歴に限定して推計してみよう。ただし、資料制約上の問題が3つある。第1に、この統計資料に示される年齢層は5歳ないしは10歳きざみであり、18-45歳、16-35歳といった年齢層を抽出できない。第2には、この統計資料において学歴は、当該教育課程の卒業者に加え、在籍者と中退者もその当該教育機関で教育を受けていた（受けている）者として一括して扱われている。在籍者、卒業者および中退者の比率についてのデータは、この統計資料からは得られない。第3に、中等教育課程は日本においては中学校（3年間）と高等学校（3年間）、ブラジルにおいて前期（4年間）と後期（3年間）に分かれているにもかかわらず、この統計資料ではその区別がなされていない。つまり、ウジミナスが応募資格とする、日本で言うところの中卒者・高卒者の数は別個には示されていないのである。

以上3つの問題については、以下のように処理して考察を進めることにする。すなわち、中等教育課程（日本で言う新制高校）卒業の年齢は、最も早くて18歳であることから、少なくとも15-17歳の年齢層は中等教育課程を卒業していないので、これらが含まれない最初の統計表上の区分である20歳以上の中等教育を受けた者を中等教育課程を卒業した者とみなす。日本で言うところの中卒者の年齢は、最も早くて15歳であることから、15歳以上の中等教育を受けた者を日本で言うところの中卒者とみなす。

ブラジルを就学地とし、ブラジルの中等教育水準の者（中等教育課程在籍者、卒業者および中退者の合計、以下同じ）で日語学校にも通学した者は、15-34歳では3,141名（うち男子1,968名）、20-44歳では1,646名（うち男子1,106名）、合わせて3,286名（うち男子2,082名）となっている³⁹⁾。少なくともこの層はウジミナスにとっての人材供給源になりえたと考えられる。なお、これらの人数には移民とブラジル生まれの両方が含まれているが、そのほとんどが二世を中心とするブラジル生まれか準二世（幼少期に渡伯した移民）であろう。

5 日本語・ポルトガル語の習得指標1：家庭での話し言葉

一方で、ブラジルを就学地とし、中等教育水準の者で、ブラジルの公立学校にのみ通学した

39) ブラジル日系人実態調査委員会（1964b）、56-57頁。「合わせて」とする数値は、当該の15-34歳人口と20-44歳人口とを加算し、そこから2重に加算される20-34歳人口を除いたもの（以下同じ）。

者 (15-34歳32,829名, うち男子20,549名, 20-44歳17,868名, うち男子11,865名) で, 家庭では十分な日本語学習を行った者はどれほどいたのだろうか。ブラジル日系人実態調査委員会が行った調査のうち, 家庭では十分な日本語学習を行ったかどうかの指標となりうるのは, 話し言葉 (悉皆調査) と日刊新聞の閲読 (標本調査) についてのものである。

第1に, 話し言葉については「家庭内で家長がその子供と話すとき, 主としてポルトガル語で話しかけるかあるいは日本語で話しかけるか, それとも両者を混合して使っているか」について調べている。前章で見たように日常会話ができることが応募条件として募集広告にしばしば登場したことを考えれば, 家庭内の話し言葉は日本語・ポルトガル語の運用能力を示す重要な指標となりうる。その調査結果の概要は以下の通りである。

全体の傾向は日本語が64.3%でかなりの比重を占めている。移民の場合は全体の傾向と同様であるが, ブラジル生まれの家長の場合, 一変して日本語は36.5%, 両国語の併用が38.2%, ポルトガル語が25.3%と移民と比較してポルトガル語の比重が圧倒的に増大している⁴⁰⁾。

話し言葉と学歴との関係は以下の通りである。ブラジルで教育を受けた場合, 中等教育水準の者に圧倒的にポルトガル語の使用率が上昇する。すなわち, 初等で17.0%が中等では倍に近い33.4%を示し, 逆に日本語の使用率が47.5%から28.0%と半減に近い低下を示している。とくにブラジルの中等教育水準の者ではポルトガル語を話す者が73.1%に達している。ブラジルで教育を受けた者の場合, 学歴が高まるにしたがってポルトガル語を話す比重は増大するという傾向が認められる⁴¹⁾。

ただしこれは, 調査委員会が自ら記しているように, 家長がその子供と話すときの言葉は, 家庭内で子供から家長に話す言葉とは必ずしも一致せず, かつ家庭内で子供同士が話す言葉とも一致しない場合が多い⁴²⁾。また, 悉皆調査とはいえ家長のみを対象としたものであって, ウジミナスが募集対象とした年齢層 (15-35/20-45歳) 全体の傾向をつかむには使いにくい。したがってここでは一般的な傾向, すなわち, ブラジルで教育を受けた者の場合学歴が上昇するに従ってポルトガル語を話す比率は増大する—それにつれて日本語を話す比率が低下する—傾向にあり, ブラジルの中等教育水準の者ではポルトガル語を話す者が73.1%に達していることを確認するにとどめておく。

6 日本語・ポルトガル語の習得指標2: 日刊新聞の閲読

第2に, 日刊新聞の閲読については「15才以上のものを対象者として定期刊行物の閲読について調査したが, 分析は日刊新聞に限定した」とし邦字新聞 (日本語による新聞) かブラジル新聞 (ポルトガル語による新聞) を読んでいるかどうかを調査している。前章で見たように,

40) ブラジル日系人実態調査委員会 (1964a), 152頁。

41) 同上書, 154頁。

42) 同上書, 152頁。

新聞を読んでいるかどうかが採用のポイントとなったことを考えれば、新聞の閲読は日本語・ポルトガル語の運用能力を示す重要な指標となりうる。この日刊新聞の閲読状況と学歴・就学地のクロス集計をしたものが表2である。この表によれば、ブラジルを就学地とし、中等教育以上で、ブラジルの公立学校にのみ通学した者（以下BBとする）のうちで、邦字新聞を読んでいる者は6.2%である（ブラジル新聞と邦字新聞の両方4.7%および邦字新聞のみ1.5%）。BBは先述した通り、15-34歳32,829名（うち男子20,549名）、20-44歳17,868名（うち男子11,865名）だから、その6.2%は15-34歳2,035名（うち男子1,274名）、20-44歳1,108名（うち男子736名）、合わせて2,118名（うち男子1,332名）となる。

加えて、この表によって前節ではウジミナスの募集対象として想定されていなかった層、すなわち、就学地が日本のみ、あるいは日本とブラジルである中等教育水準の者のうちで、ポルトガル語の運用能力があるとみなしうる者を抽出することができる。表2によれば、就学地が日本のみの中中等教育水準の者（以下JJとする）のうちでポルトガル語による新聞を読んでいる者は19.7%、就学地が日本とブラジルで中等教育水準の者（以下JBとする）のうちでポルトガル語による新聞を読んでいる者は86.0%（ブラジル新聞と邦字新聞の両方72.1%および邦字新聞のみ14.0%）に達している。表3によればJJは15-34歳5,716名（うち男子4,068名）、20-44歳8,993名（うち男子6,048名）だから、その19.7%は、15-34歳1,126名（うち男子801名）、20-44

表2 就学地・教育水準と新聞の閲読 (%)

	N	ブラジル新聞のみ	ブラジル新聞と邦字新聞	邦字新聞のみ	読まない
就学地					
日本	64,878	1.7	5.2	69.1	24.0
日本とブラジル	4,686	11.9	33.1	31.0	24.0
ブラジル	123,915	44.4	14.6	13.5	27.5
日本					
初等	54,846	1.9	2.6	68.5	27.0
中等以上	10,032	-	19.7	73.5	6.8
日本とブラジル					
初等	3,267	11.1	16.2	44.4	28.3
中等以上	1,419	14.0	72.1	0.0	14.0
ブラジル					
初等	76,758	32.4	13.9	19.8	33.9
中等以上	45,243	64.8	15.4	2.1	17.7
ブラジル学校					
初等	48,081	40.4	6.1	13.6	39.9
中等以上	29,073	74.6	4.7	1.5	19.2
ブラジル学校と日語学校					
初等	28,677	19.2	27.5	30.5	22.8
中等以上	16,170	47.3	35.1	2.4	15.1

(註) 「ブラジル新聞」とはポルトガル語による新聞、「邦字新聞」とは日本語による新聞を指している。
(出所) ブラジル日系人実態調査委員会（1964a）、164頁、ブラジル日系人実態調査委員会（1964b）、321頁。

表3 ウジミナスが示す応募条件を満たす日系人数の推計

就学地／通学先／新聞閲読	全体			男子		
	20-44歳	15-34歳	計*1	20-44歳	15-34歳	計*1
日本	8,993	5,716	9,684	6,048	4,068	6,506
うちブラジル新聞*2を閲読 (19.7%) … (1)	1,772	1,126	1,908	1,191	801	1,282
日本とブラジル	589	371	706	479	247	543
うちブラジル新聞*2を閲読 (86.0%) … (2)	507	319	607	412	212	467
ブラジル						
ブラジル学校	17,868	32,829	34,168	11,865	20,549	21,489
うち邦字新聞*2を閲読 (6.2%) … (3)	1,108	2,035	2,118	736	1,274	1,332
ブラジル学校と日本語学校 … (4)	1,646	3,141	3,286	1,106	1,968	2,082
(1) + (2) + (3)	3,387	3,480	4,633	2,339	2,287	3,081
ブラジル計 (5) = (1) + (2) + (3) + (4)	5,033	6,621	7,919	3,445	4,255	5,163
サンパウロ州・パナラ州計 = (5) x 93.84%	4,723	6,213	7,431	3,233	3,993	4,845

(註) *1 当該の15-34歳人口と20-44歳人口とを加算し、そこから2重に加算される20-34歳人口を除いたもの。

*2 「ブラジル新聞」とはポルトガル語による新聞、「邦字新聞」とは日本語による新聞を指す。

(出所) ブラジル日系人実態調査委員会 (1964a), 164頁, ブラジル日系人実態調査委員会 (1964b), 56-57頁, 321頁より作成。

歳1,772名 (うち男子1,191名), 合わせて1,908名 (うち男子1,282名) となる。また, JBは15-34歳371名 (うち男子247名), 20-44歳589名 (うち男子479名) だから, その86.0%は, 15-34歳319名 (うち男子212名), 20-44歳507名 (うち男子412名), 合わせて607名 (うち男子467名) となる。

つまり, 学校においていずれかの言語を学習する機会がない者のうち, 日刊紙の閲読状況から日本語とポルトガル語両方のある程度の運用能力を有する者と見なされるのは, 15-34歳3,480名 (うち男子2,287名), 20-44歳3,387名 (うち男子2,339名), 合わせて4,633名 (うち男子3,081名) である。

7 小括

本章の目的は, 1950-60年代のブラジルにおける日系人の状況を検討することを通じて, ウジミナスの要求に応えられるだけの優れた人材がどれほどいたのかを推定することにあった。

1958年6月時点でのブラジルにおける日系人口は43万135人であり, このうちブラジル生まれは67.7%を占め, さらにブラジル生まれの第1世代である二世は日系人口の過半を占めるに至っていた。そうした二世のうちから「日本語もポルトガル語も自由に話し, さらに双方も読み書きできる」人材が輩出されたことを踏まえれば, 日系社員を大量に必要とした当時のウジミナスにとってタイミングが良かった。同時に, 数は少なかったが平均して学歴が比較的高い戦後移民にもウジミナスは恵まれたといえる。

そうした日系人の地域的な分布は1958年時点でみて4分の3はサンパウロ州, 2割はパラナ

州に分布し、この2州合計で9割以上を占める。その一方でウジミナスが立地するミナスジェライス州はサンパウロ州の日系人口は全体の0.67%に過ぎない。

学校において日本語・ポルトガル語両方を学習する機会が与えられた中等教育水準の者は、15-34歳では3,141名（うち男子1,968名）、20-44歳では1,646名（うち男子1,106名）、合わせて3,286名（うち男子2,082名）である。家庭での話し言葉は日本語・ポルトガル語の習得指標となりうるが、ブラジルで教育を受けた者の場合学歴が上昇するに従ってポルトガル語を話す比率は増大する—それにつれて日本語を話す比率が低下する—傾向にあり、ブラジルの中等教育水準の者ではポルトガル語を話す者が73.1%に達している。学校においていずれかの言語を学習する機会がない中等教育水準の者のうち、日刊紙の閲読状況から日本語とポルトガル語両方のある程度の運用能力を有する者と見なされるのは、15-34歳3,480名（うち男子2,287名）、20-44歳3,387名（うち男子2,339名）、合わせて4,633名（うち男子3,081名）である。

以上の推計結果をまとめたのが表3である。結論としては、ウジミナスが募集対象とした者、すなわち、一般常識に明るく、日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる者は、ブラジル全土では15-34歳6,621名（うち男子4,255名）、20-44歳5,033名（うち男子3,445名）、合わせて7,919名（うち男子5,163名）いた計算になる。このうち、ウジミナスが採用活動を行ったところの、日系人口の93.84%が集中するサンパウロ州（75.68%）とパラナ州（18.16%）には、20-44歳4,723名（うち男子3,233名）、15-34歳6,213名（うち男子3,993名）、合わせて7,431名（うち男子4,845名）いた計算になる。

ウジミナスが日系人に求めていた人材の規模は、先述したように資料制約上の問題があって、「20歳以上の中等教育を受けた者を中等教育課程を卒業した者とみなす」「15歳以上の中等教育を受けた者を日本で言うところの中卒者とみなす」「ポルトガル語による新聞を読んでいる者は日常会話ができ、ある程度の読み書きができる」といった仮定を組み合わせているために、趨勢を捉えること以上の正確さを求めることは難しい。こうしたことと、実際に採用されたのはほとんどが男子であったことを考慮に入れて推定すると、ウジミナスの募集対象となりえた者は、サンパウロ州とパラナ州で高卒3,200名（作業員としては中卒4,000名）、合わせて4,800名程度はいたのではないかと考えられる。

ウジミナスには日系社員が最高で400名程度在籍していたので、当時ウジミナスの募集対象となりえた者のおよそ10分の1が入社したということになる。募集対象者の何割が応募・入社するかは、その時の社会の状況と本人の事情に左右されるであろうし、ウジミナスへの入社がどれほど当時の日系人・日系社会にとって魅力と意義のあるものであったのかにも依存する。住み慣れた土地から遠く離れた地に赴任することにも相当の抵抗があったはずである。こうしたことの実態を知るには、現時点ではもはや当時入社した日系社員からのインタビュー取材を積み上げていく他はない。いずれにしても、対象者の10分の1がウジミナスに入社したとしても、ウジミナスが日伯合弁企業として（日本側としては国家プロジェクトとして）発足したこ

とが当初から日系社会に知られていたことを考えれば、特段に異常なことではないと考える。

V おわりに

本稿の目的は、ウジミナス建設・操業開始期に大量に採用された日系社員に焦点をあて、彼らが「人から人への技術移転」において果たした役割を明らかにするための準備作業を行うこと、具体的には、ウジミナスが日系人に求めていた人材像と、その要求に叶う日系社員の大量採用を可能にした背景を明らかにすることにあつた。

Ⅱにおいて、明らかになったことは以下の通りである。1958年という比較的早い時期に日系の技師が採用されていたこと、しかも入社7名のうち5名が技師であつたことは注目されてよい。1960年5月時点で20名であつた日系社員は、1年半後の1961年11月にはその3倍以上の64名まで、1966年には400名まで増加している。日系社員の1962年までの増加傾向は日本からの派遣者の増加と軌を一にしている。

Ⅲにおいて、明らかになったことは以下の通りである。ウジミナスは、技師を含むほとんどすべての職種にわたって、一般常識に明るく、日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる日系社員を求めていた。学歴については、おおむね技師は大卒あるいは高卒、事務員・技術員は高卒、作業員は中卒をその応募条件とした。そうした日系社員を従業員構成上多数を占める事務員や作業員としても採用・配置することをウジミナスは必要とし、しかもその要求に応えられるだけの優れた人材が供給可能であつたために、結果として日系社員を大量に採用したと考えられる。

Ⅳにおいて、明らかになったことは以下の通りである。1958年6月時点でのブラジルにおける日系人口43万135人のうち、ブラジル生まれの第1世代である二世は日系人口の過半を占めるに至っていた。ウジミナスの要求に応えられるだけの優れた人材がサンパウロ州・パラナ州に4,800名程度おり、そのおよそ10分の1が入社したということになる。

ウジミナスの要求に応えられるだけの優れた人材、つまり一般常識に明るく、日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる層は、主としてブラジル生まれの第1世代である二世、幼少期に渡伯した移民である準二世によって構成される。この層は、主として二世の親の世代（戦前移民）の手によって学校あるいは家庭での日本語・ポルトガル語の学習機会が与えられたことにより、形成されてきたものである。しかも、移民50周年を迎えたばかりの1960年代初頭は、二世が労働市場に大量に参入してきた時期に重なってウジミナスが日本語もポルトガル語もできる二世を大量に採用するにはタイミングが良かったといえる。同時に数は少ないが、戦後移民も供給源となつたことにも注目すべきである。これがウジミナスの要求に叶う日系社員の大量採用を可能にした背景である。

では、初期に入社した日系技師たちは、事務員・作業員として採用された日系人は、どのよ

うな役割を果たしたのか。日本語もポルトガル語もできる日系社員たちは日本側とブラジル側の間でどのように行動し、どのような役割を担ったのか。日系社員のどのような働きが大きく異なる両国の言葉と文化を乗り越えることにつながったのか。次の課題である。

※本稿は、平成17年度関西大学在外研究による研究成果の一部である。

参考文献

- 阿南惟正（1997）「追悼の記」ウジミナス回想録編集グループ（編）『ウジミナス回想録』147-148頁。
- 阿南惟正（2007）『鉄の絆』朝日新聞社。
- アンドウ・ゼンパチ（1967）「日本移民の社会史的研究」『研究レポート』（サンパウロ人文科学研究所）第2号、3-109頁。
- ブラジル日本移民70年史編纂委員会（編）（1980）『ブラジル日本移民70年史』ブラジル日本文化協会。
- ブラジル日系人実態調査委員会（編）（1964a）『ブラジルの日本移民』（記述篇）東京大学出版会。
- ブラジル日系人実態調査委員会（編）（1964b）『ブラジルの日本移民』（資料篇）東京大学出版会。
- 伊丹英雄（1960）「建設協力団（Grupo de cooperação e Assitencia Tecnica）の紹介」『時報いばちんが』第1号、6月15日、2-3頁。
- 假屋隆二（1997）「『世話役』のおもいで」ウジミナス回想録編集グループ（編）『ウジミナス回想録』129-130頁。
- 中川靖造（1974）『ウジミナス物語—ブラジルに製鉄所を築いた男たちの記録—』産業能率短期大学出版部。
- 日本ウジミナス（1969）『十年史』。
- 齊藤広志（1960）『ブラジルの日本人』丸善株式会社。
- 鈴木正成（1967）「ブラジルにおける日本語教育の現状とその将来について」『研究レポート』（サンパウロ人文科学研究所）第2号、105-138頁。
- 「ウジミナス建設に日本の人的協力」『時報いばちんが』1966年11月30日、2頁。
- 「ウジミナス日系社員募集」『サンパウロ新聞』1962年7月31日、1頁。
- 「ウジミナス日系社員募集」『パウリスタ新聞』1963年3月9日、7頁。
- 「ウジミナス採用日系職員紹介（1）」『時報いばちんが』1961年9月10日、4頁。
- 「ウジミナス採用日系職員紹介（2）」『時報いばちんが』1961年10月10日、6頁。
- 「ウジミナス採用日系職員紹介（3）」『時報いばちんが』1961年11月10日、6頁。
- 「ウジミナス製鉄所作業員募集」『サンパウロ新聞』1962年3月20日、6頁。
- 「ウジミナス操業近し」『サンパウロ新聞』1961年11月4日、1頁。

聞き取り記録ほか

- 阿南惟正氏からの聞き取り、北九州市、2008年7月17日。
- 三浦治二氏からの聞き取り、ペロオリゾンテ市、2008年8月22日。
- 三浦治二氏からの聞き取り、ペロオリゾンテ市、2006年8月30日。
- 鈴木雅夫氏からの私信、2008年4月19日。
- 奥原譲二氏からの聞き取り、ペロオリゾンテ市、2008年8月7日。
- 岡正敏氏からの聞き取り、サンパウロ市、2006年6月27日。